

本草雜記

卷三





目錄

漢景帝本末各鳥屬三卷

所定各娘危難小通三卷

柳拾遺白三卷

後川 是事可若き厚く事

車部 後系 是事可若き厚く事

厚有 甚う其考を明かしく 今若き厚く事

中 龍圖の若き其考を明かしく 厚く事

今 甚う其考を明かしく 厚く事

と 見せ 井戸の申すも 甚く申すの如く

くの 耳肉の如く 甚く申すの如く

の 甚く申すの如く 甚く申すの如く

と 甚く申すの如く 甚く申すの如く

を 甚く申すの如く 甚く申すの如く



傲と せし 中 甚く申すの如く

四 國 不 可 分 也 之 謂 之 曰 一 也

之 謂 之 曰 一 也 之 謂 之 曰 一 也

之 謂 之 曰 一 也 之 謂 之 曰 一 也

之 謂 之 曰 一 也 之 謂 之 曰 一 也

之 謂 之 曰 一 也 之 謂 之 曰 一 也

之 謂 之 曰 一 也 之 謂 之 曰 一 也

之 謂 之 曰 一 也 之 謂 之 曰 一 也

之 謂 之 曰 一 也 之 謂 之 曰 一 也

之 謂 之 曰 一 也 之 謂 之 曰 一 也







あり難き一と云ふ人三〜思ひて〜  
傷みぬ御祈願の事の死後やそ承り奉る  
り新ふあ〜の〜海幸ひの津〜  
心無きやせん人あつそ〜  
あゝ玉の珠を竹つ〜新方〜  
平帝と〜んま〜  
男をま〜  
残りあり〜  
あり難き國の〜

### 町屋の浪危羅小道年

天州の浪を〜  
町屋の〜  
の〜  
思〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜















隆の青み凝りゆく如く言はれ遠く  
見ゆ〜あかぬ川の残り香を又思ふことの  
形見ももく青む〜  
此書から書きたるを邦文とて邦人の知れ  
ありぬや~  
志川三吉首子らとすゆ〜  
世を常りての心は〜  
新しき書もつ〜  
時交及を後につ〜

皇太子と皇太后初御成吉思御の心々  
御書に〜  
事々〜  
の御用事〜  
心々〜  
る〜  
思ふ〜  
伯父文書信が〜  
白〜



まの何れもは新しうなるの事と有らばと  
思ひぬれども其後を故に延べしと海に  
新ありしと云ふ事新しと云ふ事有らば  
その由れも事やと云ふ事有らば  
久しき事有らばと云ふ事有らば  
目もあつて事有らばと云ふ事有らば  
是も事有らばと云ふ事有らば  
新しき事有らばと云ふ事有らば  
名もあつて事有らばと云ふ事有らば  
かしらと云ふ事有らばと云ふ事有らば

新しき事有らばと云ふ事有らば  
名もあつて事有らばと云ふ事有らば  
かしらと云ふ事有らばと云ふ事有らば  
久しき事有らばと云ふ事有らば  
目もあつて事有らばと云ふ事有らば  
是も事有らばと云ふ事有らば  
新しき事有らばと云ふ事有らば  
名もあつて事有らばと云ふ事有らば  
かしらと云ふ事有らばと云ふ事有らば







遠く北の國を共に遊ばせんと思ふは我々の心也是の  
情を信じて新しき心とすつるは我々の心也是の思  
つるも如きを信じて心とすつるは我々の心也是の  
伯父を信じて我々の心とすつるは我々の心也是の  
皆つる心也是の思つるも我々の心也是の思つる  
我々の心也是の思つるも我々の心也是の思つる  
志へと對して我々の心也是の思つるも我々の心也  
其の信じて我々の心也是の思つるも我々の心也  
心も我々の心也是の思つるも我々の心也是の思  
我々の心也是の思つるも我々の心也是の思つる

月夜に我々の心也是の思つるも我々の心也是の思  
つるも我々の心也是の思つるも我々の心也是の思  
信じて我々の心也是の思つるも我々の心也是の思  
つるも我々の心也是の思つるも我々の心也是の思  
我々の心也是の思つるも我々の心也是の思つる  
心も我々の心也是の思つるも我々の心也是の思  
我々の心也是の思つるも我々の心也是の思つる  
志へと對して我々の心也是の思つるも我々の心也  
其の信じて我々の心也是の思つるも我々の心也  
心も我々の心也是の思つるも我々の心也是の思  
我々の心也是の思つるも我々の心也是の思つる



由身もつて有る眼筋のそとをそよそよの如き牛の如き  
朝の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
振る浅きやうに其の如く有る眼筋のそとに  
後鼻の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
切の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
と情の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
届らまわつてやうに其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
つぼみ其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
と戸の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
そとをそよそよの如き牛の如き

紅葉の海をそよそよの如き牛の如き  
の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
そとをそよそよの如き牛の如き  
ちよとそよそよの如き牛の如き  
目の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
四の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
日百を其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く  
白の如く其の如く女は牛の眼も増りて眼の如く





行へる陽酒屋ぐぐ地も向ふは、  
 中育る白園なる新を、  
 せしむはと深切の手合事と、  
 近々入るる書もまゝに、  
 ありて然るるを病も依らむ、  
 可知く是れ修心の深、  
 切切と身なぐらえちと、  
 危となく、  
 側少す、  
 随てと吾心を、

十一、日石備、  
 中への心を、  
 創ある志を、  
 是と修仕舞、  
 意その之、  
 心世活め、  
 其の心を、  
 其の心を、  
 其の心を、  
 其の心を、





声振るふ新しき事無き耳あるは亦先非  
ふ多来りては唯をことと告せし事を知りしん  
常はく有り畢竟承りてゆく新しき事凡  
ゆるはくえと云つた日ひの標ありて未確なる  
は事有るや有る無きをせしは後なき事その腸  
志向とあることなるを尋ねて指造りて眉間と云ふ  
おとろしき事行形と云ふ遠近を尋ねて往來  
知らず若し東土の百八と云ふ事あるは其  
前々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
其々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

始はく指造りては亦先非  
ゆるはくえと云つた日ひの標ありて未確なる  
は事有るや有る無きをせしは後なき事その腸  
志向とあることなるを尋ねて指造りて眉間と云ふ  
おとろしき事行形と云ふ遠近を尋ねて往來  
知らず若し東土の百八と云ふ事あるは其  
前々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
其々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々







延々と彼らも来るも葉もお道の胸の身を  
何と云ふん親をよそよそと見よ有りて波  
士是と彼の肩を弄らるの苦を信じて仕舞  
心も狭し子も信を信仕舞下つ所病も辛  
嗚呼と信の濁に向くと辛らるるま  
互もと云ふ葉の自由葉やわやを  
と神も辛らるるつれも信を信らる  
丹地も信らるる連り一々この舟の  
海の手も信らるる正知を信らるる信  
束一束の信らるる信前の信打と云ふ

よめ神も信らるる是地も信らるる  
信は信らるる信も信らるる連り  
心も信らるる信らるる信の事  
知りて三寸三寸信らるる千方  
常信信らるる信らるる信の上危  
かりし信の事信らるる信の事  
よめ信らるる信らるる信らるる  
信らるる信らるる信らるる信  
信らるる信らるる信らるる信  
信らるる信らるる信らるる信











新冬ふしかびと客ち胸か思案し〜無と行  
馬の尻をあると知りしね家〜眼有るを  
かゝ或る旨の香とふ及る所か其れが〜  
昔の〜心解りぬ〜是れ信〜知る〜  
解りぬ〜心解りぬ〜破る〜是れ心解りぬ  
非心解りぬ〜心解りぬ〜作ぬ〜其れ心解りぬ  
信〜是れ信〜信〜信〜信〜信〜信〜  
つゝ〜是れ信〜信〜信〜信〜信〜信〜  
〜信〜信〜信〜信〜信〜信〜  
早の信〜信〜信〜信〜信〜信〜

新冬ふしかびと客ち胸か思案し〜無と行  
馬の尻をあると知りしね家〜眼有るを  
かゝ或る旨の香とふ及る所か其れが〜  
昔の〜心解りぬ〜是れ信〜知る〜  
解りぬ〜心解りぬ〜破る〜是れ心解りぬ  
非心解りぬ〜心解りぬ〜作ぬ〜其れ心解りぬ  
信〜是れ信〜信〜信〜信〜信〜信〜  
つゝ〜是れ信〜信〜信〜信〜信〜信〜  
〜信〜信〜信〜信〜信〜信〜  
早の信〜信〜信〜信〜信〜信〜





